

ひかりのこ

10月園便り
聖ミカエル幼稚園
2016年9月21日

月主題：ためして

『天使の声』

先日、男性の教会員の方から嬉しいメールをいただきました。そのままご紹介いたします。

『8月25日(木)午後4時頃、園庭樹木の枝切をしていた時、外に遊びに出てきた園児(女の子)の一人から「いつもありがとうございます」と声をかけられました。まさに「天使の声」そのもの、驚きと感激で名前を聴くのも忘れてしまいました。疲れも吹き飛び、快適な作業日和となりました。このような心優しい園児が育っていること、先生方へ感謝！すべては神様の御業に感謝です。』

聖ミカエル幼稚園は、札幌聖ミカエル教会の幼稚園です。今では「教会付属」ではなく、「学校法人」立となっていますが、その精神は昔のままです。ですから、幼稚園の子ども達は、お父さん、お母さんだけでなく、教会の皆さんにとっても、神様から与えられた、大切な宝物です。なかよしランチ、入園時の絵本バッグ等作成のお世話、そして、このお手紙のように、朝に夕に人知れず園庭のお世話をしてくださっている方々がたくさんいます。

幼稚園に来られるお母さん方も、教会の皆さんにお会いすると、「いつもなかよしランチなど、心を込めて作っていただいて、本当に感謝しております。」とお声を掛けていらっしゃいます。幼稚園の先生方も子ども達に、「みんなは、お父さん、お母さんだけではなく、神様や教会の皆さんに守られて、かわいがられて大きくなるのだよ。」とよく教えています。その土台があるからこそ、こんなに素敵な子ども達が育つのでしょうか。

後でお預かりの先生にきくと、この子は、いつもはちょっと恥ずかしがり屋の、年長の女の子でした。暑い中、自分たちのために働いてくださる教会の方々を見て、素直に出た言葉だったのでしょう。

今年の8月末は、暑さでうだるような日々でしたが、職員みんな、涼風が吹いたようなさわやかな気分になりました。このように人と人とを結び合わせてくださる、神様に感謝です。

園長 渡部良子

キリスト教保育

「説教」

日曜日の礼拝で、牧師は必ず説教をします。裏話をお話しすると、これが悩みの種で、毎週語るというのは相当しんどい作業です。そもそも「説教」という言葉が良くありません。説教というと怖い顔をして上から目線で語るというイメージがありますが、教会の説教とは、牧師が自分の考えを述べるのではなく、聖書にあるイエス・キリストの姿を浮かび上がらせるというものです。ただ、そうと分かっている、居並ぶ人生の大先輩を前に、自分のような者がこんな役割を担っているのか、いつも考えさせられます。

そこでどうしても必要になるのは、話す者と聞く者が相手の立場を理解し、許し合うという関係です。もしそこで、「お前にそれをいう資格があるのか」とか、「どうせ言っても分かってももらえないだろう」という目線で相手を見ると、そこには感謝も喜びも生まれません。

私たちは時に、相手を評価することをやめてみる、むしろ、この人もきっと辛い立場なのかもしれない、思い切って自分を脇に置いて寛容になることが必要なのです。そういう意味では、教会の礼拝というのは、人間にとって大切な訓練の場でもあります。

親子の関係にも同じ側面があるような気がします。こどもが小さいうちは、こどもがいうことを聞くか聞かないかが大きな問題になります。しかし、老いては子に従えというように、いつか、反対に親がこどもの意見を素直に受け入れられるかどうか問われる時がやってきます。場合によっては、こどもが親に説教することだってあります。長年親として君臨してきた者としては複雑な瞬間ですが、それはこどもが自立し、成長した証でもあります。そして何よりも、許し合っているからこそ実現する関係に違いありません。

チャプレン 下澤 昌